

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成20年1月5日発行(毎月5日1回発行)  
第48巻1月号(通巻582号)

# 風土



くわりんの実

神蔵

器

人生の第三楽章くわりんの実  
地球の端少し焦して萩焚けり  
くれなゐは禁色のつる梅擬  
青郵の亡き杉並区八つ手咲く  
早世は神のねたみや冬薔薇

一葉忌どこへも行けぬ井戸一つ  
手をつけば父のこゑあり冬たんぽぽ  
くわりん供ふ桂郎三十三回忌

真如堂 三句

時雨るるや金糸観経曼荼羅図  
俳諧奉行去来の墓や木の実打つ  
金輪際十夜の綱を握りしむ  
笹鳴や山半眼に句碑の立つ



# 竹間集

同人作品



月の柱

田村すゝむ

残されて月の柱に凭りかかる  
玄関に置く實篤の南瓜かな  
果樹園の奥より林檎背負ひ出す  
牧場の霧の郵便受けポスト  
色変へぬ松エレーヌの遺髪塚  
空開けて月の出を待つ坐禅石  
稲滓火の燻り走る志太郡

子のこ糸の

瀬戸

悠

一列に歩く木道秋気澄む  
猫の首つまみあげたる秋思かな  
沖晴れて水引草に翳りあり  
舷に波たふたふと秋淋し  
行く秋の本丸跡に海を見て  
子のこ糸の天につつぬけ芒原  
鳶の輪の中の一城冬はじめ

暮秋

塩田博久

駅前「市民憲章」木の実降る  
柿紅葉土塀に掛けて長梯子  
山晴れて香の立ち初めし菊畑  
駿河路や俄かガイドの爽やかに  
茶畑や眼で追ふ果てに秋の天  
秋風とくぐる軒端や十団子  
とろろ汁運ぶ揃ひの紺緋

新ばしり

— 外川 玲子 —

夢のあと霧の流るる佐久郡  
分去れのうしろの空の烏瓜  
満月の村出て水の冥さかな  
山に星眠れば露のこぼれけり  
ことだまに逢ふ月の夜の山平ら  
山よりのはがき一枚秋冷ゆる  
旅鞆ふくらんでをり良夜かな  
杉玉の軒吹く風や新ばしり  
村中を走り抜けたる秋祭  
石たたき日暮きてゐる瀬音かな

しばらくは花野に雲のとどまれる  
虫の名を忘れてゐたり虫しぐれ  
長き夜の地藏菩薩の念珠かな  
芋一つ洗うて足れり風の音  
雁や本棚に置く虫眼鏡  
門閉ざすとき秋風の影法師  
芙蓉咲くいちにちといふ重きもの  
おほかたは仮の世のこと曼珠沙華  
墨匂ふ亡母の硯を洗ひけり  
月の座二十五年前の観月祭に師かんはせの顔かんはせや月のぼる

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

鬼の子も吹かれてゐるや十団子

浅田 光代

どんぐりや登りて風の二百段  
鶏頭の色を尽して丸子かな  
縄文の土の匂ひやとろろ汁  
秋風や座禅のままに鉄舟逝く

新松子 太平洋へ声を上ぐ

柴田 久子

秋日濃し寺に五七の桐の紋  
蔦紅葉宇津ノ谷峠に火の走り

葛の細道

天高く文学の道いくさ道

丁字屋の筆太のれん鳥渡る

白樺の林を透くる秋の風

水井千鶴子

十月や天のととのふ山河あり

旅をゆく色なき風を道づれに

薄曇の笛

いにしへの寺宝一管蚯蚓鳴く  
日の匂ひ月に残りて榎櫃の実

蝗翔ぶ寺の知行の五石五斗

間島あきら

眠れざる眼の二つ月の海

蟬なしの笛秋風へ吹きにけり  
爽涼の母屋おおくど座敷くど  
一跨ぎ 豆州へ渡す 鯛雲

萱葺の保存民家や鯛雲

土井 三乙

敬老の日を老人として過ごす  
後より声かけらるる十六夜  
大ききの揃はぬ秋の茄子挽ぐ  
爽やかに片手を挙ぐる別れかな

新人賞作品

## 母の絹糸

森田節子

椿咲くおほやまみちの一里塚  
竹炭に罅入る音や余寒なほ  
塩の町雨に灯して雛飾る  
佐保姫に松の切株匂ひ立つ  
夕映えの沖に雲立つ虚子忌かな  
一直線に灯す仲見世走り梅雨  
何時しかの脛の打身や羽抜鳥  
大甕に河骨背伸びして咲けり





---

夏柳戸毎に橋の暮しかな  
大夕焼明日取りこはす家の立つ  
星月夜水音ひびく棚田かな  
白河の関へ一里や曼珠沙華  
住み古るや小粒になりし百匁柿  
抽斗に母の絹糸秋惜しむ  
茅葺きの小児科医院木槿咲く  
朴落葉音たて二等三角点  
一葉の生涯二十四冬薔薇  
佗助の横向き忍び返しかな  
色紙をあられ散らしに紙を漉く  
半日に落ちたる城や山眠る

新人賞作品

朴の花

奥山絢子

水平に船すべりゆく春隣  
鳥交る上野西洋美術館  
恋雀卍崩しに飛び立てり  
しやぼん玉会はずじまひとなりけり  
牡丹咲く阿弥陀如来のたなごころ  
滝風に開きしばかり朴の花  
青丹よし奈良の初瀬や滴れり  
滴りに迦陵頻伽の音色かな



---

一山に過客の如く涼みをり  
その中に鳴らぬ風鈴ありにけり  
サンドレス翹を広げる如く座す  
少年の竹刀百振り雲の峰  
病葉の一葉遠くに落ちにけり  
冷やかや夢の中まで鍵かけて  
明王は守り本尊一位の実  
枯野原おのが胸の火見えてくる  
光太郎賢治の語る榾火かな  
冬萌や野口英世の母の文  
二ノ月の空を入れたる志野茶盃  
たまきはる蛇笏墨書や冴返る

---

◇特別作品◇(抄)

## ドイツの秋を惜

遠藤逍遙子

スイス航<sup>エ</sup>空<sup>ア</sup>の粋な歓迎栗御飯

秋の雲ギリシヤ神話を演じをり

フランクフルト

ゴツホにも素直な絵ありうすら寒

パイロイト

白樺や霧より現るるオペラハウス

ドレスデン

五カ国語飛び交ふドーム吾亦紅

木洩れ日の美しき村道草紅葉

教会のライトアップに秋惜しむ

橋桁に水位の跡や秋深し

行く秋やポツダム三国会議場

長き夜や旅締めくくる焼きうどん

# 風土独語／神蔵器



鬼の子も吹かれてゐるや十団子

浅田 光代

焼津グラントホテルで行なわれた風土鍛錬会で、特選に採った句である。

句は宇津ノ谷の地に伝わる十団子の由来と、可憐な蓑虫を鬼の子とか、鬼の捨て子などと残酷な名前の原因になったという『枕草子』の、「みのむし、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似てこれもおそろしき心あらんとて」で始まる一章である。

秋風はすべてのものに吹き、勿論、鬼の子にも十団子にも等しく吹いている。鬼の子は自分が捨てられたことも、ことによつたらすぐ近くの家の軒に吊るされている十団子が、かつての鬼、父であるかどうかも知らず、秋風が吹けば「ちちよ、ちちよ」と鳴いている。その子を捨てたおそろしい鬼も、今は魔除けとして家内安全、道中安全のお守りとして、十ヶにくだけた白骨の化身のような十ヶの団子となっている。

いかなる根拠があつて、清少納言は蓑虫を鬼の子と決めつけてしまったのであろうか。また俳人は『枕草子』によつて、鳴くはずのないこの虫に「蓑虫鳴く」を季語として好んで用いてしまった。鬼の子こそあわれ、今となつては己の運命のつたなき、無情を嘆くばかりであらう。

天高く文学の道いくさ道

柴田 久子

「鶯の細道」の前書がある。鶯の細道は平安時代の初めから鎌倉時代にかけて東西を行きかう主要道路であった。現在は国道一号线をはさむように宇津の山越えの旧東海道と鶯の細道が走っている。鶯の細道の途中に在原業平の

駿河なる宇つの山辺のうつつにも

夢にも人に逢はぬなりけり

の歌碑が建っている。現在はハイキングコースになっているが、「伊勢物語」をはじめ定家、家隆、順徳院など多くの歌人、文人にも詠われた文学の道であり、時には戦の道であった。なお豊臣秀吉が小田原征伐の時に通つた道は鶯の細道ではなく旧東海道である。

十月や天のととのふ山河あり

水井千鶴子

十月は一年中でも最も気候温暖さわやかな月である。天高く、空は碧く澄み、どこまでも清澄の気が充つる。やがて、間もなく草木は黄ばみ、高原や北の国は紅葉の時を迎えるが、その一歩手前、山々は鋭く研ぎすまされる。「天のととのふ山河あり」は、まさに十月、それも半ば過ぎであらう。

なお、こうした句は都会の、山々から遠く離れた生活の中では、なかなか困難である。

芋の露連山影を正うす

蛇笏

山河はや冬かがやきて位に即けり

龍太

こうした名句を参考にした作品でないことを祈りたい。

# 風土集



## 神蔵器選

かげる木も日の当たる木も小鳥の木

上尾

根岸 善行

鯛雲 長き梯子を担ぎ出す

試験管に水引草を挿しておく

林檎山を余りし水の迸る

木犀のかをりはいつも濡れてをり

うなづきも言葉の一つ秋の逝く

行く秋や風を袂にシテの舞

十月の大方埋まるカレンダー

烏骨鶏の卵に続き柿届く

仕舞ひ火の火の粉飛び交ふ月の庭

四阿へ熟るる通草の門潜り

まだあをき空に今年の望の月

秋の蚊の腕を離るる速さかな

傘立の傘の乱れも秋思かな

秋日濃し半分下ろすブラインド

東京

柴田 久子

東京

柿沼 盟子

榎 檜の実坂に小さな美術館

さいたま

須藤美智子

鷹柱赤城の風の吹く前に

寺町の角曲るたび金木犀

秋の風形見に貰ふ念珠かな

羽衣の松の二代目三保の秋

爽やかや似顔絵書きの筆の先

横浜

安永 圭子

朝寒やシナゴージュへと黒帽子

愛犬の探検みやげぬのこづち

秋日 和烏も笑ふ満艦師

パリ

ユネスコに能の写真や秋うらら

木簡に税の一字や一葉散る

横浜

近藤幸三郎

十団子に小春賜る峠道

探幽の杉戸の猿に冬来る

城攻めの道の細りや蕎麦の花

丁子屋に芭蕉さんの間とろる汁